BEST FRIEND, MY AUNT

羅幻徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＥＳＴ　ＦＲＩＥＮＤ，　ＭＹ　ＡＵＮＴ

【Ｎコード】
Ｎ８２２１Ｏ

【作者名】
羅幻徒

【あらすじ】
少女・実乃里と恐くて美人な夕子オバサンの物語。

第一話　ハロー、ファンタジー！！　一　実乃里、十二歳の初春

お正月のこう例行事といえば、親戚一同が集まることなんだけど、あたしの家ではそれが二回あったりする。

一度目はあたしの家で、おじいちゃんの弟おじいちゃんと妹おばあちゃんや、お父さんの兄弟とその家族が集まるえん会。

二度目はお母さんの実家で、お母さんの両親や、弟の泰徳オジサンとおヨメさんの夕子オバサンとで行われるえん会。

二回も続くとさすがにゲンナリしちゃうんだけど、そこはやっぱりお正月ということで、あたしや弟の浩と孝はお年玉という下心をかくしたすまし顔で出席する、という訳。

でも、これがけっこうツラいのよね。クリスマスはついこの間のことで、その後には博の誕生日が二十八日にあったばかり。間が空いてるといっても、昨日いいだけごちそうは食べちゃった訳だから、もう見ただけでお腹がイッパイになっちゃう。しかも、泰徳オジサンの所には子供がいないから、あたし達がヒマをつぶせるような物なんか全然なくて……仕方ないから自分でゲームを持ってきてたりするんだけど、あんまりやってるとお父さんやお母さんにしかられちゃう。だから、おじいちゃんやおばあちゃんの世間話を聞きながら、点けっ放しになってるテレビを見たりするんだけど……どうしてこの時期のテレビって、面白い番組をやってないのかしら。

ともあれ、お年玉さえゲットしちゃえば今すぐにでも帰りたい気満々のあたし達をよそに、お父さんとお母さんは、まだ全然帰る気ないって感じ。お父さんはおじいちゃんの飲め飲めアタックを受けるのに一生懸命だし、お母さんはお母さんでウチのおばあちゃんの悪口をコッチのおばあちゃんにグチッてるし……もう三時間くらいしゃべってるのに、全く止まる気がしないのはどうしてなんだろう。そして、浩と孝は……というと、泰徳オジサンとカードバトルの真っ最中。何だか、あたしだけ仲間はずれって感じでチョーつまんな

い。
　そうしてふてくされるのにもあきたあたしは、また、いつもみたいにこっそりと二階の部屋へと遊びに行くことにした。
　おじいちゃんの家はあたしの家よりも大きくて、部屋もいっぱいあるからちょっとしたぼう険気分を味わえる。小さい頃からしょっちゅう来てるから、どこにどんな部屋があるかは判りきってるんだけど、やっぱりそこは自分の家じゃないのよね。どこもかしこも見慣れた場所なのに、いつも新鮮な気持ちがしてしまう。何より、この家には本がいっぱいお置いてある部屋がある。あたしは、そこがお気に入りなのだ。
　でも、この部屋に行くのはちょっと大変なの。だって、この部屋は――夕子オバサンの部屋なんだもの。

　階段を上がったろう下のつき当たり、そこがあたしのお気に入りであり、チョー苦手でもある部屋。
　物音を立てないようにそろそろと歩いていって、おそるおそる中をのぞき込んでみると……やっぱり、そこには夕子オバサンがいた。いつもみたいにソファにすわり込んで、しかめっ面して本を読んでる。下にいないから、もしかしたらとは思ってたんだけどね……。
　夕子オバサンは、泰徳オジサンと結婚してもう十三年目になる専業主婦。『子供がいないといつまでも若いわね』なんてお母さんはイヤミを言うけど、確かに、夕子オバサンはキレイというかすごい美人だ。お母さんのはだは化粧しててもシミだのシワだのでとんでもないことになってるのに、夕子オバサンはいつもスッピンなのにまるで化しょう品の広告に出てくる女優さんみたい。だけど、ウチのお母さんは、はっきり云ってオバサンが大きらい。お母さんだけじゃなくおばあちゃんも……口には出さないけど、おじいちゃんもお父さんも、きっと夕子オバサンがいだと思う。実はあたしも、き

らい派の一人だったりする。
だって夕子オバサンってば、チョーが付いても足りないくらいアイソ悪いんだもん。いつもムスッとした顔してるし、おばあちゃんやお母さんが何か話しかけてもロクに返事もしやしない。この間のひいおじいちゃんの法事の時だって、『何を頼んでも「はい」とも「判った」とも云わないんだから』なんて、お母さんがブリブリ怒ってた。その分あたしに用事が回ってくるんだから、ホント、勘弁してもらいたいんだけどなぁ……なぁんていっても、結局は夕子オバサンが全部やってくれてたから、あたしがやることなんて何もなかったんだけどね。
要するに、このオバサンってのはとにかく変わり者なの。自分からしゃべることもないし、ほとんど返事もしない。やることはやってるから目立って文句は言えないけど（って、おばあちゃんが言ってた）……返事くらいしてもいいんじゃない？　ってことは、あたしでも思っちゃう。『口が利けない訳じゃないからタチが悪い』って、ダンナ様である泰徳オジサンにまで言われちゃうんだから……泰徳オジサンったら、よくこんな人と結コンする気になったわよね。絶対、顔につられたんだ。
……なんてことは、おいといて。
とにかくあたしは、そんな夕子オバサンのいる場所にいたい訳ではないのだ。いっしょにいたって気まずいだけだし、おしゃべりもしない人といてもつまらない。でも、お母さん達が帰るって言わない限り、このつまんない時間は続く訳で……だから、何がなんでもこの部屋に入りたい訳。だから、ホントはイヤ……っていうか、正直に言うとコワいんだけど、本を読ませてもらうためにはその部屋に入らなければダメなのよ。
そんな訳で、あたしは大きく深呼吸をして、夕子オバサンの部屋

に足を……と、思ったその時。
「手は洗ったの？」
「きゃ！！」
とつ然ひびいたのは……それは、聞けること自体がめずらしい夕子オバサンの声だった。余りにもとつ然だったので、あたしは思わず飛びあがっておどろいた。
そう、夕子オバサンって人は、こういう『イチャモンをつける』時だけはカンペキにしゃべれるようになるのだ。そこがみんなにきらわれてるんだけど……きっと、そんなこと分かってないわよね。
ともあれ、思わずたじろいだままでいるあたしに、夕子オバサンは不機げん丸出しの声で言った。
「手は洗ったの？」
そして、ギッと音がしそうなほどすごい顔でにらんでくる。……コワい、コワ過ぎる……。
あたしは思わずごくりとノドを鳴らしてから、両手を思いっきり広げて見せた。
「ちゃ、ちゃんと洗ったわよ。おかしだって持ってないし！」
本当は洗ってないんだけど、三十分くらい前にトイレに行ったからダイジョウブだと思う。
何でこんなにチェックが厳しいかというと……実は昔、おかしでべたべたになった手でさわって、本をよごしちゃったことがあったからなの。確かに、他人の物をよごしちゃったのは悪いと思うけど、その時のあたしは幼ち園に通ってたくらいの年だった。今なら本がどれだけお金がかかるものなのか分かるようになったけど、そんな年の子にそういう細かい注意なんてできるはずがない。なのに、いつまでも根に持ってるんだから……それって、ちょっとしつこ過ぎると思うんだけど。
だけど……あたしはどうしても、時間をつぶすためのアイテムが必要なの。お母さんがおしゃべりにあきるまで。でなければ、お父さんがよいつぶれてしまうまで。さもなければ、浩と孝が帰りたい

とダダをこねるまで。そんなのいつになるか分からないのに、それまでボーッと待ってるだけなんて絶対にできない。そしてあたしは、そんな時間があるなら本を読んで過ごしたい、と思うくらいの文学少女なのだ。

そんなあたしを見すかそうとでもするように、夕子オバサンはじろじろとあたしの顔や手を見て……そしてトートツに、興味を失ったように広げていた本に目をもどした。何も言わないけど、これが夕子オバサンのオッケーのサイン。あたしはほっと胸をなで下ろした。これで心置きなく本を読むことができるって訳。

本を読むなら静かなほうがいい、っていうのは、最近あたしもしみじみと感じてることだ。だって、ウチで本を読もうとするじゃない？　そうすると、浩や孝のさわぐ声が聞えてきたり、お母さんの『勉強しなさい』って声が聞こえてくるの。そうなると、ちっとも集中なんかできやしない。特にお母さんなんて、あたしが何か悪いことでもしてるみたいにキンキンした声でさわぐんだもの、気が散って仕方ないったらありゃしない。マンガばっかり読んでておこられるなら、それも仕方ないかなって思うんだけど……さし絵が付いてるだけでおこられたときは、さすがのあたしもキレそうになった。だって、その本は読書感想文の宿題で出された本だったんだから。お母さんが一生懸けん命見てる韓流ドラマの方がよっぽどくだらないと思うのは、あたしのヘンケンなんかじゃないわよね？

だからね、どんなに夕子オバサンが嫌いでも、ゆっくり本を読みたいならこの部屋にかぎるって思ってる訳なのよ。同じ部屋を使ってる泰徳オジサンだって、いいって言ってくれてるし。何より、夕子オバサンも本を読んでるだけなら放っといてくれるし……って、まぁ、放っておかれてるのはいつものことなんだけど。

しかもこの部屋、本当にいっぱい本があるのよ。もしかしたら、

ウチの近所にある市立図書館より多いんじゃないかしら。しかも、その図書館の本はボランティアの寄せ集めみたいなのばっかりだから、古本屋で売ってる本よりきたない。何より、新刊がほとんど……どころか、全く入ってこないもんだから、全然読みたいと思える本がなかったりするの。

でも、夕子オバサンの部屋はちがう。リビングじゃないかってくらいの広さの部屋は、窓のある場所以外が全部本だなになってるの。文庫本用のカラーボックスから、学校にあるようなスチール製のたなまで。ちょっと高そうな本だなには百科辞典まで並んでるんだから、その時点で町立図書館とは雲でいの差。

残念なのは、ジャンルのまとまりないが全然ないこと。三百巻も続いてるＳＦ小説があるかと思えば、幼児向けの絵本が並んでいたり、法律学講座の教本のあるとなりには、建築のしくみなんてのがあったりする。何だか難しそうな専門書に歴史小説、コバルト文庫にハーレクイン・ロマンス。ビックリなのは、ボーイズラブ系のえっちな少女小説まであることかしら。そして、やけに目につく黒い背表紙は……うら若きオトメなあたしには、とても口にできないようなタイトルの本。さすがにこの辺りは泰徳オジサンのシュミだと思ってたんだけど……どうやら、そうじゃないみたいなのがすっごいナゾ。

まぁ、そんなことはおいといて。

とにかく、夕子オバサンの部屋に来れば、本屋にいるみたいな気分で本を選ぶことができるって訳。しかも、話題の本なんかは大抵あったりするんだから、お小づかいの少ないあたしにはすごく便利な場所なのだ。それに、ここなら学校の図書館でいつも貸し出し中になってる本までそろってる……夕子オバサンという障害さえ気にしなければ、まさに天国と言っても過言じゃない。

そんな訳で、あたしはいそいそと百科辞典のたなへと近寄った。そして、百科辞典の二段上、ちょっと大きめのハードカバーの本が並んでるたなから、ツタの葉みたいな模様の入った本を取り出す。これは、発売してもう半年経つシリーズの一巻目で、未だにクラスで話題になってるファンタジー小説だ。

本のタイトルは『五竜の剣』といって、伝説の剣を探す旅の物語。登場するナゾだらけの主人公やエルフや騎士や魔法使いが、とにかくかっこいい……とは言っても、あたしは表紙やさし絵を見ただけなんだけど、とにかく、何だかとっても面白そうなの。クラスメートの何人かはすっかり読み終わってるし、今読んでる最中だって人ももっといる。当然、学校の図書室にもある本なんだけど、やっぱりいつも貸し出し中になってるのよね。それは、本自体が厚めのせいか値段もちょっと高めなせい。だから、ずっとガマンしてたんだけど、この間、オバサンが読んでるのを見つけちゃったの。それで読み終わるのを、ずっと、ずっと待ってたという訳。

そんなあたしが『五竜の剣』を両手に思わず感無量！　な顔をしていたとき、ふと、視線を感じて振り返った。見ると、夕子オバサンが何やら意味深な顔でこっちを向いている。あたしはまるで、ヘビににらまれたカエルな気分で夕子オバサンを数秒見返して、一度息を飲んでから、なけなしの愛想笑いを浮かべて本をかかげて見せた。

「読んでいいでしょ？」

「読めば。待ってたんでしょ？」

まるっきりバレてるし。何で？　一度だって、そんな話したことないのに。

思わず冷や汗が出ちゃったあたしを、夕子オバサンはまんまヘビみたいな目でニラみ付けてきた。いや、もしかしたら他の意味があったのかも知れないけど、あたしにはどうしてもニラんでるとしか思えない目だった。お願い、その目はやめて。マジでコワいんだから……。

だけど、そんなことは序の口だった。オバサンのコワいところは、こんなところじゃない……ってのを、あたしはすっかり忘れてた。

「敏美さんにねだって、しかられてたもんね」

夕子オバサンのコワいところは、その顔だけじゃい。一番コワいのはとんでもないくらいにすごい記憶力で、大昔にぽろっと言った何気ない一言や、はずかし過ぎて逆にすっかり忘れちゃったようなことまで、実に細かく覚えてることだ。あたしが小さい時に本をよごしちゃったこともその一つだけど、木登りをして下りられなくなって大泣きしたことや、階段から転がり落ちて鼻血を出したことなんかも、たった今見たばかりみたいな臨場感で話してくれる。しかも、いつも以上に意地悪な顔で。

ちなみに、夕子オバサンが今言ったことだって、それこそ二ヵ月前のことになる。『五竜の剣』の三巻目が発売されて間もない時で、早くもクラスメートの何人かは親に買ってもらってた。あの頃は図書室の新着図書のお知らせにも予定が入ってるというだけで、いつ頃、何冊入ってくるのかはさっぱり判らなかった。だから、お母さんにシリーズ買いをせがんでみたんだけど……確かに、国語の宿題だからってウソをついたのは悪かったけれど、その月のお小づかいを半分にするほど悪いことをした訳じゃないと思う。それほど欲しかったんだって気持ち、どうして判ってくれないのかな。

ともあれ、あたしは面白がってる顔の夕子オバサンをすっきり無視して、『五竜の剣』をだきしめながら夕子オバサンの座っているソファの反対側のはしに座った。そして、厚いページの半分辺りに見当を付けてページを開く。本当は、三週間くらい前に図書室で借りられたんだけど、貸し出し期間が一週間しかなくて、読み切れないうちに返さなければならなかったのだ。大きらいな瀬戸陽子はまだ借りることすらできないみたいだから、何が何でも早く読み終わらなくちゃ。

見覚えのある旅装束の主人公のさし絵を見つけて、あたしは更に三回ページをめくった。そして見つけた。返さなきゃいけないから、

と図書室の返却口のそばで立ち読みしていた最後のセリフが……。

と、その時、一階の方からひびいたアクマのささやきが、あたしをどん底につき落とした。

「実乃里ぃ、帰るわよぉ」

――トンビに油あげって、まさにこんな時のことを言うんだわ。

あたしはそんなことを考えながら、頭の中が真っ白になった状態のまま、開いたばかりの本をにらみつけていた。どうして？　どうしてなの？　お母さん。さっきのおしゃべりテンションは、どう見てもあと二時間は止まらないはずだったじゃない……。

そうか、きっと、お父さんがよいつぶれちゃったのね。そうでなければ、こんなに早くに帰るなんて言わないはずだもの。そういえば、お父さんは昨日もずいぶん飲んでたしなぁ……。

思わずガックリと肩を落としたあたしは、本をだきしめて部屋を飛び出すと、階段のふちまで走っていった。そうして、階段の下でもう一度大声を張り上げようとしているお母さんを見下ろしながら、自分でも不機げんだと分かる声で言った。

「もう帰るの？」

「何言ってるの。おじいちゃんとおばあちゃんを置いて、二階なんかに行ってるくせに。ほら、帰るわよ。さっさと支度しなさい」

確かに二階ににげ込んできたけど、おじいちゃんやおばあちゃんだって、あたしを相手にしてなかったじゃない。と言おうと思ったけれど、当のおばあちゃんがお母さんの後ろでニコニコと笑っていた。この状きょうでは言えない。言ったが最後、泊まっていけと引き止められるのがオチなのだ。そうなれば本を読む時間もあるだろうと思うけれど、実際にはねるまで……どころか、ねてからも、おばあちゃんとずっと一しょにいなくちゃいけなくなる。そんな事態だけはゴメンこうむりたい。あたしはもう赤ちゃんじゃなくて、十

二歳の女の子なんだから。
あたしはトボトボと夕子オバサンの部屋にもどろう……としてふり返ったら、そこに夕子オバサンがいてビックリしてしまった。よく見ると、本を読んでるときにはなかったエプロンを付けてる。そうか、夕子オバサンは後片付けをしなくちゃいけないんだ。
そんな夕子オバサンに、だきしめていた『五竜の剣』を返そうとしたら、
「持ってけば？」
思わず、え？　と声に出したら、
「読みたいだけ全部。ちょくちょく来られるのも迷わくだし」
「……いいの？」
「汚したら承知しないからね」
そうしてそのまま、階段を下りていった。
ぼう然としてしまったあたしは、だけど、お母さんの急かす声で我に返った。そして、夕子オバサンの部屋に引き返して、さん然と並んだ『五竜の剣』を本だなから一気に引き抜いて、その重さも忘れて両腕でかかえ込んだ。だけどやっぱり重かったから、ソファに立てかけるように置いてあった空のショルダーバッグを勝手に借りて、担いで帰ることにした。
「実乃里、何やってるの！　早くしなさい！」
階段の下からお母さんのどなり声。いつもならすぐ頭に来ちゃうんだけど、あたしは平気な顔で階段を下りていった。だって、帰ったら『五竜の剣』が読めるんだもの。しかも、レンタル期間は無制限！　そしてきっと、夕子オバサンは続きもしっかり買うはずだ。
また貸してくれるかな……というよりも、むしろ積極的に借りる気でいるあたしは、見送りに出てくれたおじいちゃんやおばあちゃんの後ろに立っている夕子オバサンの無愛想を、ちらりと見てほほ笑んだ。

第二話　オバサンの友達　一　実乃里、十二歳の春

新しい制服に、新しいカバン。そして、新しい学校。今日は、あたしの中学校の入学式だった。

お受験のある私立じゃなくて小学校の延長のような公立の中学校だけれど、お父さんの方にとっても、お母さんの方にとっても初孫である私の入学式は、どっちのおじいちゃんもおばあちゃんも大喜び。そろって入学式に来てくれたから、やっぱりちょっと特別なのかも知れない。でも、そんな大所帯で来たのはウチだけだったから、それを知ったときはかなりはずかしかった。

ともあれ、入学式が終わったあたし達は、お母さんの実家に寄ることになった。本当は真っ直ぐ帰ってレストランに行く予定だったんだけれど、お母さんの方のおばあちゃんが「上がって行きなさい」と云い出したら、お母さんでさえ断ることなんかできはしない。まぁ、お母さんに断る気があったとは思えないけれど。

だけど、おばあちゃんの家に行っても何もなかった。あんまりにもしつこく寄れって云うから、もしかしたらごちそうでも用意してくれているのかと思ったのに、おばあちゃんの家にはジャージ姿のオバサンがいただけ。おせんべいやミカンは山ほどあったけれど、それだけではお腹をふくらませるってあり得ないと思う。だって、今日はあたしの入学式だったんだから。

そこで活やくさせられるのが、オバサンだ。

『気が利かない人ね』と云わんばかりに買い出しを命じられて、にぎやかなおしゃべりをくり広げているおばあちゃん達をしり目に買い物に行くことになった。オバサンの不キゲン顔が更に強張っていたから、本当におばあちゃんは何も予定してなかったんだな、と思う。さすが、お母さんのお母さん。ノリだけで予定を決めるところなんて、本当にそっくり。

あたしは、そんなオバサンの買い出しに付いて行くことにした。

おばあちゃんは「今日の主役はそんなことしなくていいの」なんて云ってくれるけれど、おじいちゃんとおばあちゃんが二人ずつ、お父さんとお母さんにあたしと弟達、そしてオジサンとオバサンという大所帯の買い出しは、とんでもない量になるはずだもの。オジサンも行くのかと思ったけれど、ずっとお父さんやおじいちゃんとしゃべってばかり。弟達は相変わらずゲームばっかりやっているし、お母さんもでんと座っているだけなんだから、オバサンを手伝ってあげられるのはあたししかいないことになる。お母さんやおばあちゃん達の止まらないおしゃべりにうんざりしていたのもあるけれど、何より、ただ待っているだけだと更にお腹が空きそうだ。

そんな訳であたしは、オバサンの運転する車に乗って、いざデパートへと向かったのだった。

正直に云うと、オバサンは運転がとても上手だ。

お母さんの運転はなぜかいつもヨタヨタしていて、曲がるときなんて車のどこかをいつも歩道のすみやへいにこすりつけるように走っている。しかも、ありえないくらいゆっくり走るから、いつも後ろから来る車に追いこされたり、アオられたり、最後にはクラクションまで鳴らされたりしている。スピードが出ているのもコワいけれど、ものすごいスピードで追いこされるのもかなりコワい。なのにお母さんは、ちっとも気にならないらしい。

だけど、オバサンの運転では全くそんな思いはしなかった。車はトラックみたいな大きなものなのに、オバサンの運転は角を曲がるときも、真っ直ぐな道も、パーキングにバックで停めるときですらチョー余裕だった。片手の手の平でハンドルをくるくる回すなんて、お父さんですらやっているところを見たことがない。しかも、車を降りて気付いたんだけれど、アスファルトに引かれた線を全くはみ出していなかったのだ。お母さんなら、前から入れたってこんな風

にはできやしない。どころか、絶対に下がり過ぎて車をぶつけていると思う。

でも、その運転は別の意味でコワかった。だって、基本的にスピードが出過ぎているんだもの。いつもお母さんの車を追いこしていくような車が、オバサンの運転する車にどんどん追いぬかれていく。しかも、信号で止まった後が更にキョー悪。まるで百メートル走みたいな勢いで走り出すんだから……コワくてコワくて、あたしはずっとシートベルトとドアのハンドルにしがみついているしかできなかった。

デパートに着いた時のあたしは、コシがぬける一歩手前のへろへろな状態になっていた。

お母さんの実家でごちそうになる時は、大抵手巻き寿司になる。その方が、自分の好きな物を食べられるし、自分で巻いて食べるのが楽しいから……というのは実はおばあちゃんの受け売りで、おばあちゃんがあたしや弟達の分を巻いて喜んでいる、というのがその真相だ。

今日もおばあちゃんは、オバサンに手巻き寿司の用意を命じていた。しかも、最初から手巻き寿司用に切りそろえられたネタではなくて、固まりのままの物を買ってくるように、と云っていた。理由は簡単、手巻き寿司用に売られているセットはネタの一つ一つが小さくて、量もとっても少ないから。固まりを買えば大きめにできるし、そうすればあたしや弟達が喜ぶと知っている。用意するのもオバサンの役目だから、おばあちゃんは楽しいところだけ手間をかけているという訳だ。

いつもそんな調子だから、手慣れたオバサンはいつものように大きなカートを引っ張り出して生せん食品のコーナーへ向かった。あたしはそのカートをおす役目を買って出たけれど、実は車に少しよ

っちゃったから歩く支えが欲しかった、というのが本音。それに『五竜の剣』をまだ借りっぱなしにしているから、その罪ほろぼしの意味もある。もちろん、貸してくれたお礼のつもりも。

ともあれ、オバサンに付いて歩きながら、大きなカートを必死になっておしていた。カートの車輪がぎいぎいと鳴っていて、きちんと動いていないみたいなのだ。きちんとおしていないと、右に左にとふらふらしてしまう。オバサンがカゴをのところをつかんで引っ張ってくれているけれど、それでもなかなか真っ直ぐには進んではくれなかった。

その時、

「はた迷惑な車が停まってると思ったら、やっぱりアンタのだったのね」

その声に振り向いたオバサンは、何と、実ににっこりと笑っていた。

「カヤコじゃないの、久しぶり〜。めずらしいんじゃない？　アンタが買い物なんてさ」

「こう見えても、私だって主婦なのよ」

にらむようにオバサンと向かい合ったその女の人が、今度はあたしの方を向いた。その顔が、はなやかといっていいくらいの笑顔になる。

「こんにちわ、実乃里ちゃん。しばらく見ないうちに、ずいぶん美人さんになったわね」

「あんまりほめるな。調子に乗るから」

「あら、女はほめられてキレイなるのよ。ねぇ、実乃里ちゃん」

どう答えていいのかわからなかったので、あたしもにっこり笑ってから「お久し振りです」と云った。

自分で『こう見えても』と云っちゃうこの人は、シキ島カヤコさんという名前だ。オバサンの友達で、実は数年前までウチの近所に住んでいた人。その頃は『イソ貝』という名字で、元旦那さんの方は今もウチの近所に住んでいる。新しいおくさんはまだいないけれ

ど、そこのおばあちゃんがとってもイセイのいい人だから、あの人が元気な限りヨメの来てはないわね、なんてお母さんがこっそり云っていた。
　シキ島のおばさんは、あたしも知っているブランド物のショルダーバッグを肩から提げて、まるで雑誌にのってるようなスーツを着こなしていた。オバサンは化しょうすらしていないうえにジャージ姿だというのに、シキ島のおばさんはまつげまでばっちり決まっていて、とてもあたしより年上の男の子がいるとは思えないくらい若々しかった。
　そんなシキ島のおばさんが、あたしのおしているカートを見て、さりげなく自分の空のカートを寄せてきた。
「おしずらそうね。おばさんのと取りかえてあげる」
　そう云いながら、入れたばかりのマグロとホタテのパックを移し変える。
　ちらっと見えたおばさんの爪は、とってもきれいなネイルアートがきらきらと光っていた。……あぁ、おばさん。色んな意味でとっても素敵。
「また今日はずいぶん買い込みそうね。お祝いごとか何か？」
「こいつが」とオバサンはあたしを指さした。「中学校の入学式だったんだよね。で、まさに今、ウチで大集合してるって訳」
　ちらっと苦笑するみたいに口元を歪めたシキ島のおばさんは、それでも何とか笑い出さずに済ませたみたいに、あたしの方へと笑顔を向けた。
「そう、入学式だったの。おめでとう。私も何かお祝いしなくちゃ」
「いいえ、お気持ちだけで十分です」
「まぁ、云うこともすっかりお姉さんね。やっぱり女の子は大人になるのが早いわ～」
「だれよりも早く大人になったヤツがよく云うよ。そういえば、信也は元気でやってる？」
　その名前に、あたしは思わずどきんと胸をはね上げた。

シキ島のおばさんがまだイソ貝だった頃、あたしと弟達はいつも信也兄ちゃんの後を付いて歩いていた。小さい頃から背が高くて、おばさんにそっくりな顔がかっこよくて、あたしはこっそり信也お兄ちゃんにあこがれていた。だけど、おじさんとおばさんがリコンして、信也兄ちゃんはおばさんといっしょに引っこしてしまった。信也兄ちゃんと同じ小学校に通えると思って楽しみにしていたのに、その小学校に信也兄ちゃんはいなくて、それがとても悲しくてさびしかった。

今はどうしているんだろう、と小さい頃の信也兄ちゃんの姿を思いだしていたあたしは、思いっきりの期待を込めてシキ島のおばさんを見上げていた。

そんなあたしには気づかなかったみたいだけれど、シキ島のおばさんは少し照れたような笑顔でオバサンに向かって答えていた。

「信也？　もちろん元気よ～。最近はサッカーにのめり込んじゃって、毎日真っ黒になって帰ってくるみたい」

「みたいって何よ？　みたいって」

「だって、仕方ないでしょ。あの子が帰ってくる頃には、私は出勤してるんだから」

そしてシキ島のおばさんは、明るいクリ色のかみをなびかせるようにかきあげた。

そういえば、お母さんが昔こっそり云っていたっけ。イソ貝のおくさんは水商売の女だ、って。イサ貝のおじさんとの出会いもおばさんの勤めているお店だったらしいし、いつも派手な服や化しょうが下品だと近所のおばさん達とひそひそしゃべり合っていた。確かに派手といわれれば派手かも知れないけれど、そんなに下品かな？

とあたしはこっそり首をひねる。今だって、まるでテレビに出てくる女優さんみたい。もしかしたら、シキ島のおばさんがきれいだからヤキモチを焼いていただけなのかも……というのは、考え過ぎじゃないような気がする。

「店任されると大変なんだ？」

「えぇもう大変よ〜。やとわれホステスの方がよっぽど楽。まぁ、若い子をアゴで使えるようになったから、四六時中ごきげん取らなくてよくなったのは楽だけどね」
「イヤなママだなぁ」
やっぱり水商売なんだ、と大人の世界の話にあたしはすっかり小さくなってしまった。
「これでもたよられてるのよ？　ぜひ飲みに来て確かめて。旦那がパチンコでいないときにでもさ」
「ツケが利くなら行ってもいいけど？」
「こんなご時世にこわいこと云わないでよ」
シキ島のおばさんが楽しそうに笑うのを見上げながら、ふとオバサンの方へと目を向けてみた。手はしっかり手巻き寿司のネタを次から次へとカートに放り込んでいるけれど、オバサンの顔もとても楽しそうにほほえんでいる。オバサンもちゃんと化しょうをすればいいのに、とあたしは思った。

そんなあたしを、オバサンが不意ににらむような目で見返してきた。
「何か食べたいのは？　後で足りないとか云われても困るんだけど」
きつい口調で云われて思わず口ごもってしまったあたしを見かねたのか、シキ島のおばさんが横からイクラのパックを取りながら云った。
「あなたのお祝いなんだから、好きなもの云った方がいいわよ。ほら、このイクラなんかおいしそうじゃない？　こっちのカニのむき身も大きくて、食べ応えありそうよ」
「何でもいいからオススメを入れてってよ、カヤコ」
「何でもって……相変わらず魚介類は嫌いなのね。許容はん囲はツナだ？」

「残念だけど、ツナも許容外。最近はカニカマもアウトになっちゃってさ」
「どんだけテッテーしてるのよ」
シキ島のおばさんに笑われたオバサンの苦笑いの横で、あたしはかなりおどろいていた。オバサンって、魚食べなかったっけ？
だけど、よくよく考えてみると、オバサンが何かを食べているところ自体をあたしは思い出せなかった。覚えているのは、台所で忙しく働いている後ろ姿ばかり。しかも、あたし達が食べ終わった頃には後かたづけで背中を向けちゃっているから、食べているところなんて気にしたことすらなかった。おばあちゃんの好きな物やきらいな物はわかるのに、あたしは、オバサンの好きな物もきらいな物も何も知らない。
ショックだった。確かにあたしはオバサンが苦手だ。コワいし、愛想も悪いし、しゃべったことも少ないし、そんな人を好きになるなんてなかなかできない。それでも付き合いがあるのはオバサンがお母さんの弟ヨメだからで……だけどあたしは、おばあちゃんやおじいちゃんがメインだといっても、オバサンとはほとんど毎週のように会っているのだ。なのに、オバサンが何かを食べているところすら覚えていない。これって、少しおかしいんじゃないだろうか？
いや、間ちがいなく絶対おかしい。
「実乃里ちゃん、どうしたの？」
そう云われて、あたしは急いで顔を上げた。心配そうにあたしをのぞき込んでいるシキ島のおばさんに笑って見せながら、うぅんというように頭をふる。
そんなあたしの態度が気になったのか、シキ島のおばさんがオバサンをにらむように見た。
「ほら〜、アンタが冷たいことというから、実乃里ちゃんがしょんぼりじゃったじゃないの〜」
「あ、いえ、そうじゃないです！」と、あたしはあわてた。「少し車によっちゃったみたいで」

「まぁ、大丈夫？　夕子ったらハンドルにぎる性格変わるから」
性格はある意味変わってないと思うけれど、あたしは笑ってごまかすことにした。
「とにかく、具合が悪いなら少し休んだ方がいいんじゃない？　カフェコーナーでも行きましょうか？」
「いえ、本当に大丈夫です」
「無理すんな。少しくらいおそくなったっていいんだぞ？」
あたしが本当に具合悪そうに見えるのか、オバサンまで心配そうな顔になっていた。その変化は、よく見ていないとわからないくらいではあったけれど。
そんなオバサンに、あたしは笑顔を見せる。
「本当に大丈夫。休んでも帰りはまた車なんだし。それに、あんまりおそくなったら、おばあちゃんがうるさいじゃない？」
そうだった、というようにオバサンが明らかにうんざりした顔をした。そんなオバサンの顔を見て、シキ島のおばさんが思わずといった感じで吹き出した。
涙目になって笑うシキ島のおばさんをにらみつけながら、オバサンはウニのパックをワシつかみしてカートに放り込んだ。あたしも同じように、大好物であるウニのパックを選んでカートに入れる。
「じゃあ、そういうことなんで」と、まだ笑っているシキ島のおばさんの頭をこつんとたたいたオバサンが云った。「今度時間見て遊びに行くわ。信也にもよろしく伝えておいて」
「判った。都合がついたら連絡して。信也に早く帰ってくるように云っとくから」
「そんなこと云って、自分の息子をメイド代わりに使うんだ？」
「あの子の作るホットケーキはおいしいのよ？」
そう云って自まんげに笑うシキ島のおばさんは、今度はあたしを見ながら云ってくれた。
「実乃里ちゃんもいっしょに遊びに来てね。で、その時は、おばさんじゃなくてカヤコさんって呼んでくれるとうれしいな。いいでし

ょ？　お友達なんだから」
おばさんのくせに、とからかうオバサンの横から、あたしは元気に返事をした。
「はい、カヤコさん」
じゃあ、と手を振り合って、あたしとオバサンはレジへと向かい、カヤコさんは野菜コーナーの方へと歩いていった。
その後ろ姿を見送りながら、あたしはちらりとオバサンの顔を見上げる。いつカヤコさんの家に行くの？　と聞きたかったけれど、きっと答えてくれないだろうな、と思って目を反らした。
オバサンは、いつも通りのちょっとむすっとしたような顔で、レジのお姉さんにお金をわたしていた。

車によっちゃった、と云ったのを気にしてくれたのか、帰りの運転はかなり速度がゆっくりだった。それでもお母さんのカメみたいな速度ほどではないけれど、すごくていねいでさっきよりもずっと乗り心地が良かった。
家に着いたあたしは荷物を持って、オバサンといっしょに台所に入った。おばあちゃんには「こっちにおいで」と云われたけれど、「あたしは今日から中学生なんだから」と云ってオバサンを手伝うことにした。
最初はビックリしていたオバサンだけれど、大皿や小皿や湯飲みを次から次へと出すように云ってきて、あたしは文字通りの大回転で大皿をシンクに運んで、小皿をテーブルに並べて、その横に湯飲みを用意した。
オバサンは、慣れた手つきでさばいたネタや冷蔵庫から出したサラダ菜やかいわれ大根を大皿に次々と並べていた。そうしながら、出かける前に用意しておいた炊き立てご飯を寿司おけに移し変えて、手早く寿司飯を作っている。更に、冷蔵庫の中からワサビのチュー

ブと取り出すと、中身が半分しかないのを見て買い置きを引き出しから取り出した。オバサンの手際がよすぎて、アタシは何をしていいのか判らなくなる。それでも何とか発見したおしょう油差しの中身を足したり、ネタを取るための割りばしを用意したり。お手ふきはいらないのかな、と思っていると、オバサンに布きんのある場所をアゴで示された。

だけど、大皿に並んだネタを見て、あたしは一つ思いついた。のりを手巻き寿司用の大きさに切っているオバサンに話しかける。

「オバサン、卵焼き作ってもいい？」

これなら、オバサンも食べられるでしょ？

そう云おうと思ったけれど、顔を上げたオバサンににらむような目を向けられて、あたしは何も云えなくなってしまった。

だけど、オバサンがコワい顔をしたのはちょっとだけで、そのあとも顔はコワいままだったけれど、手元ののりに目を戻しながら一つこっくりとうなずいて見せてくれた。

「卵、三つは残しといて」

冷蔵庫を開けると、パックのままの卵があった。フタを開けて、卵を三つ、卵スタンドへと移し変える。他はパックごと取り出して冷蔵庫の扉を閉めた。

おナベの入っている引き出しを開けて卵焼き用のフライパンを取り出した。ボウルを出して、卵を割る。砂糖を少し多めに入れたのはあたしの好みだけれど、今日はこがさないようにしなくちゃ、と思った。

だってこれは、オバサンに食べてもらうものなんだから。

第二話　オバサンの友達　一　実乃里、十二歳の春（後書き）

ご精読アリガトウございました。
ご意見・ご感想・ツッコみなどは遠慮なくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8221o/

BEST FRIEND, MY AUNT

2011年4月28日21時40分発行